

民族内対立の現出

ケニア共和国第8回総選挙

における

ベレ人の投票行動

片上 英俊

1997年12月29日、ケニア共和国において第8回総選挙が実施された。その際シアカゴ選挙区(有権者数2万3209人)では、住民の大部分を占めるベレ人社会の内部にかつてないほどの亀裂が生まれた。ケニアは小選挙区制を採用しているため選挙が住民を興奮のつばにまきこみ凄惨な闘争へと発展することもまれではないが、当時私が調査をおこなっていたK村の住民に、これほどまで過熱した選挙はなかったと言わしめたのがこの年の総選挙であった。本稿では、総選挙にいたる過程をとりわけ国会議員選挙を中心に言及することにより、有権者の投票がベレ社会を二分する形でおこなわれたことを紹介したいと思う。

1 第8回総選挙までの政治状況

ケニアの中央部に位置するシアカゴ選挙区の住民構成は、その隣のカチョカ選挙区と並び、そのほとんどがベレ人で占められている。この二つの区がベレ県を構成する。ベレ人の人口はおよそ10万人、周辺の民族とくらべ少数派に属する

(1989年実施の国勢調査の数字)。土地を求めてこれまでもベレ県へ移住してくる者もないわけではなかったが、シアカゴ区では依然としてベレ人が多数を占めている。

1988年までシアカゴ区はエンブ東区の一部を構成し、隣接するエンブ人居住地域にまたがっていた。88年の選挙以降エンブ東区は、民族分布に沿うかたちで、シアカゴ区(主にベレ人が居住)とルニエンジエズ区(主にエンブ人が居住)へと区分された。88年の国会議員選挙では当時現職のS・マテがシアカゴ区から再選を果たした。

1991年、ケニア・アフリカ人国民同盟(KANU)の一党制が廃止され、翌年複数政党制のもとでの選挙が復活した。マテは野党のフォード・ケニアから出馬したが、同じく野党の国民会議党(Kenya National Congress)から出馬の新人G・ドゥイガが当選した。マテの選挙地盤のシアカゴ区エプロレ地区(人口3万1304人)に候補者が乱立し票が分散したのに対し、ドゥイガはシアカゴ地区(人口2万6279人)からの唯一の候補者であったため、知名度が低かったハンディを乗り越えて、僅差で当選

を果たしたのだった。この選挙で、与党KANUはシアカゴ区内得票数第5位と惨敗してしまった。

しかしこの選挙から3年後の1995年には状況は一変する。この年ドゥイガが国民会議党を離党し与党KANUに加わったのだ。同年12月、離党により、補欠選挙がおこなわれた(ケニアでは憲法40条で政党移籍により議員資格が剥奪されることが定められており、現職議員が離党したばあい補欠選挙が実施される)。『ウィークリー・レビュー』誌によると、国会で唯一の国民会議党所属の議員だったドゥイガは、2年後の総選挙で再選をめざすため、潤沢な資金をもつKANUへ鞍替えしたという。補欠選挙では、KANUから再出馬した現職のドゥイガが再選を果たした。

野党の民主党(Democratic Party of Kenya)を支持する有権者が多い周辺の選挙区とは対照的に、シアカゴ選挙区では1995年の補選が契機となり、与党KANUの指名を勝ち取ることが97年の総選挙での当選への近道だと認識されていたようだ。そのため97年2月17日にベレ県で実施されたKANUの役員改選(その役職は地方政治におけるステータスの一つ)と、同年11月の党の国会議員候補指名選挙は、12月の総選挙をにらみ、立候補予定者の思惑がからんだ重要な機会となった。

2 KANUの役員改選

対立の現出

1997年2月17日にベレ県全域で実施されたKANUのベレ副支部の役員改選は、地域住民がザガナとエルンビという二つの集団に分離対立する契機となった出来事である。

ベレ社会では、個人がどの外婚クランの出身であるかによって、「ザガナ」か「エルンビ」のどちらかに振り分けられる。クランは外婚の単位と

して機能しているのに対し、ザガナとエルンビは少なくとも現在ではそういった特定の役割をもたない慣習的な区分にすぎない(この区分はベレ社会だけに存在するわけではなく、文化的に最も近い隣のエンブ社会でも確認されている)。この2区分は、クランとの系譜関係をたどれないので、クランがその構成要素となった二つの集合とでも言うべきものである。国勢調査で使用される指標はベレやエンブといった部族のレベルまでしかあつていないので、正確な数字は不明であるが、住民の間では、ザガナとエルンビはベレ人の全人口のほぼ半数ずつを占め、地理的には混住していると理解されている(1995年に私が実施したK村とその隣接村落の世帯調査ではザガナ119世帯、エルンビ117世帯、不明7世帯であった)。

さてこの日の役員改選には秘密投票ではなく、ムロロンゴとよばれる投票方法が採用されたことが重要であった。1988年の選挙から導入されたムロロンゴは、整列投票とでも訳すことのできる選挙方法で、自分が支持する人物のポスターの前に一列に並び、それを集計する。K村の役員改選ではエルンビの候補者がすべての役職を独占する結果となったが、その選出に整列投票が採用されたことによりエルンビの人間がエルンビの候補者に並ぶという排他的な投票がおこなわれたことが露呈されたのである。その結果、地域社会を二分する対立という事態が招かれたというのだ。

以上の説明は1997年9月にK村を私が再訪したときに聞いた役員改選のあらましである。それに端を発する地域内の対立について私がたずねたところ、村人の話はずぎのようなものであった(ただしこの対立が私の調査当時進行中であり、村落内の人間関係に密接に関わることから、中立な立場での調査の実施は困難であった。私がお世話になった一家の主人がザガナに属していたため、本稿の記述は全体的にザガナ

側の情報を下敷きにしていることをお断りしておく)。

村人の話によれば、ザガナとエルンビの対立の背景にはベール人居住地域がエンブ県から分かれ県に昇格したことがあるという。それまでは、コーヒーや茶といった有望な換金作物をもち経済的に豊かなエンブ人と、環境に恵まれず所得水準の低いベール人という対立はあったが、ザガナとエルンビというベール人社会内での対立は見られなかったというのだ(ベール県の新設は1995年12月の補選の際ドゥイガの公約の一つとしてあげられた。96年2月23日にはその新設が発表されベール人の長年の望みがかかった)。しかし97年2月のKANUの役員選挙にあたっては、議員や行政首長などの役職がこれまでザガナに独占されてきたとして、エルンビに属する複数の政治家がエルンビの人間だけを秘密裏に集め、エルンビの候補者に投票すること、ザガナ側に対して協力を拒むことを参加者が亀の血を飲んで誓ったというのである。一方97年9月19日には、地域住民の間に浸透しているザガナとエルンビの対立を重く見たこの地区の行政首長が、その解決を探るべく長老たちを召集した。長老たちはその解消のため祝福儀礼をおこなうことで合意したが、結局その儀礼は実施されず、この日の話し合いも対立の解消につながらなかった。また9月27日深夜に地元K村のKANU支部長が自宅から数キロ先の場所で目撃されたことは、エルンビ側が秘密集会を開いている疑惑を裏づける出来事としてザガナの間で語られた。

これ以外にも両者の対立を示す現象として周囲の人びとがあげる出来事がある。たとえばK村の中心地である市場ソコ・ムジンガに2軒目の酒場が開店したことである。前回の調査時には酒場が1軒しかなかったが、1997年の再訪時には酒場がもう1軒開店していた。ビールも手にはいと聞き、ここ数年の発展ぶりに私は感激したのだが、

これが大間違いであった。飲酒を原因とする喧嘩を回避するため、ザガナの人びとはザガナが経営する酒場を利用し、エルンビの人たちはエルンビが経営している酒場を利用しているというのだ。

また私も個人的にこの対立の結果と思われる事態に遭遇した。私が住み込んでいた小屋の屋根に葺く茅をK村の女性自助グループの人たちに集めてくれるようお願いしたところ、当日集まってきた人たちは夫がザガナに属する家の女性だけで残りのメンバーは来なかったのである。

このように1997年2月のKANUの役員改選の場でザガナとエルンビの対立の構図がエルンビ側からザガナ側に突然示されたことが契機となって、その対立の図式はKANUの候補者選出を経て総選挙に至るまで住民の思考をとらえることになっていったのである。

3 KANUの候補者選出から総選挙へ

1997年11月27日実施のKANUの候補者指名選挙では、国会議員選挙と県会議員選挙それぞれに出馬する候補者が選ばれた(その選出にも先述のムロongoがもちいられた)。

国会議員選挙には現職のG・ドゥイガを含めて6名が関心を示していたが、結果的にS・M・イタ(実業家、ザガナ)とJB(前上級判事。汚職疑惑で当時係争中。エルンビ。JBは通称、本名はJ・ムトゥリ・ジョカ)の2名が争うことになった。

イタの立候補は、ザガナとして統一候補を出すべく、ザガナの人びとが11月21日に集まり話しあった帰結であった。かくして当初受動的な立場に立っていたザガナ側の政治家たちも、この段階から積極的にその対立を利用していくことになった。エルンビ側が同様の話し合いをもったかは不明であるが、結局複数のエルンビ出身者が立候補をと

り下げたため、エルンビ候補はエヴロレ地区が地盤のJBひとりになった。この結果、K村の住民にとって指名選挙はザガナとエルンビの対立の構図でとらえられることになったのだった。

候補者選出の投票翌日、イタの当選の噂が広まった。しかしその次の日にはJBの当選が公式に発表された。この結果に怒ったのがイタ陣営であった。彼らの言い分によると、開票管理者のM(エルンビ)が票数を操作したというのだ(私の手元にある各開票所での投票数の記録では、接戦ながらイタの得票が上回る)。イタ側は、KANUの不服申し立て委員会に対して選挙無効の訴えを起こした。

投票日から2日間は、ラジオを通じて選出のやり直しが決定したという告知が流されたり、逆にそれを否定する告知がおこなわれたりと怪情報が飛び交ったが、12月4日、イタの申し立てを却下するとの裁決が最終的に下った。

同日、この裁定に対してイタは思い切った行動に出た。開票の際に不正がおこなわれたことを理由に、彼の影響下にあったザガナ側の県会議員立候補者を全員引き連れ、突如民主党からの出馬を彼は表明したのだ。また12月8日には、イタ陣営は5000人規模の集会を開き、支持者に対してKANUからの決別を宣言した。当初民主党からは1992年の総選挙と1995年の補選に出馬し、ともに次点に終わったE・ジョエ(エルンビ)の出馬が予想されたが、その指名をイタがとりつけたことにより、総選挙においてもザガナとエルンビの対立の構図が再び成立することになったのである。

12月10日から投票日までの20日間におよぶ選挙運動期間中、候補者は各地で集会を開き支持を訴えた。紙幅の関係上、選挙運動の細部には言及できないが、12月29日の投票の結果は表のとおりである。

投票結果

候補者	政党	得票数	
			%
S・M・イタ	民主党	9,764	52.3
JB (J・M・ジョカ)	KANU	8,617	46.2
F・N・カゴ	自由党	65	0.3
V・N・ジョカ	社民党	224	1.2

イタ、JB以外に立候補した残りの2名、なかでもカゴは前回の総選挙で2836票を獲得したにもかかわらず、今回の選挙では票を全く獲得できていない。イタとJBの因縁の対決の背後に退いてしまった観がある。このことから、短期間の間に成立したザガナとエルンビの対立が住民の投票行動に影響を及ぼしたことが窺えるのである。

以上が1997年のシアカゴ区での総選挙にいたる過程の素描である。総選挙では問題の2人がほぼ半分ずつ票を分け合っており、住民が語るザガナとエルンビの対立に選挙の結果が符合しているかに見える。しかし局外者である私にとって、有権者の投票を左右したこの対立を身近に感じることは容易なことではない。恐らくここで重要なのは、投票結果を含めた数々の出来事はあくまでもその対立を裏づける副次的証拠であって、何よりもまずその対立が住民の状況認識のレベルですでに成立していたという点だと思われる。それではなぜ近代国家に付随する制度としての選挙で伝統的な範疇にもとづく対立が現れたのだろうか。もちろん選挙はベールにとって外部から導入された異質な制度である。したがってそこでは既存の範疇の意味の組み替えが生じていることが考えられる。それを説明するためにはその成立過程について歴史的な観点から検討する必要があるが、この点については改めて論じたい。

(かたかみ・ひでとし/東京都立大学大学院)